

「午後4時」気分青年へ

会社気にならず生きる

人生のために利用しても構わない

小倉千加子



心理学者

「人生を一日に喩えると、あなたは今何時にいますか？」と訊ねたら、23歳の女子が乾いた声でこう言った。「自分たちは生まれてこの方、ずっと午後4時の気分ですよ」。何かに夢中になったことなど一度もないと口にする若い女性は大人たちが想像している以上に多い。

◆「本当の自分」に苦しむ

先日、ファストフードの会社に勤めていた23歳の男子が、クリスマスに1人50個のクリスマス・ケーキを売るように言われ、親がノルマ達成のために数十個のケーキを購入し、近所や知人に無料で配った直後に退職した。彼は「大学時代の友だちもみんなもう辞めるし、辞めた奴もなにかやっているし」と言ったという。



朝日新聞 04 (H16). 3. 31



松永真「日々の中から-6」

地方では有名な銀行に採用されて、やはり1年で辞めた男子は、銀行の仕事は顧客のためといいながら、実は利潤追求できないと失望し、寮業の職業訓練を受け始めた。行ってみると同じような経歴の青年ばかりだったそうだ。大学で経済学を専攻しながら、陶土を手で触る仕事や寿司職人の道を選び直す男子にとって「生の直接性」と「関係の純粋性」が得られる仕事こそ人間の「本当の仕事」なのだ。が、将来本当に彼らが陶工やプロの板前になれるかどうかはわからない。

最初から「大卒無業」になるフリーターも激増している。彼らの一部には、「本当の自分」という幻想を持つ者がいる。「本当の自分」など実はどこにもないのに、幻想の自我が肥大し、現在は常に「空虚」で、世界との不調和感に苦しめられる。

一方で、「自分で働いてお金を得たい」という意志のある青年は、目下多くが営業職か現業に配属されて働いている。40度の熱があっても、「仲間に迷惑がかかると」「いまどき、これくらいのことでは当たり前なんだ」と母親の腕を振り払って出勤する者さえいる。知的な親ほど、子どもに働けと言うべきか、そんな会社を辞めよというべきかわからない状況だ。

就職は結婚と似ている。一つは、どちらも「自分にはこの人(会社)が必要なんだ」と思い切ることでしか決まらないこと。親が「そんな相手はやめなさい」と言っても、本人の意志が強ければ決まる。第二に、「これは自分の理想の結婚(仕事)ではない」と思っているからである。「主知主義」の罠である。

◆入手すると愛は消える

人とは、自分が愛するものから愛されることを求めるが、相手から愛されれば愛されるほど自分の存在を見失う。なぜなら、彼らが求めているのは、自分のような者など愛してくれないはずがない相手からの愛であり、相手が自分を愛しているかわかった途端に、その愛の特権性、すなわち自分の存在理由は失われるからである。グルーチョ・マルクスは言う。「私は私を入れるようなクラブには入りたくない」。精神的付加価値(ブランド)の愛の帰結である。かくして、結婚相手に対する要求も同じく、就職に対する要求も

ほとんど高くなり、しかもそれが手に入るとわかるや仕事への愛は失われる。人は愛すれば愛するほど孤独になる。それなら、はじめから誰をも愛さない、どこにも就職しなければいいと、彼らは考える。いったん就職(結婚)してしまえば、自己の価値は有限のものになる。だから、肥大した幻想我を持つ学生は就職活動から逃れはじめ。就職と結婚は、ここでもまた同じである。2人の人間が同時に愛し合うことはできない以上、なぜ関係性を作る苦勞をしなければならぬのか。しかも、会社との関係では圧倒的に不利である。

彼らの中には、「凡庸」な自分が愚直に努力しているところを人に見られて「痛い」と思われたくない気持ちも潜んでいると、私は思う。

現実には、会社の内部にも、人間の価値が喪失させられていく組織に服従することなく、技術を磨き、仕事自体に没入して生きている人はいる。就職と結婚の唯一の違いはそれだ。自己信頼(自信)さえ持てれば、会社は人生のために利用してもいい。諦めではなく、「気にかけない」で生きるという方法がある。会社の平均寿命はたかだか40年、人間の寿命の半分である。午後4時を過ぎてからディナーは始まるし、デザートも夜食もありなのである。

おぐら・ちかこ 52年大阪生まれ。早稲田大大学院修了。『結婚の条件』(朝日新聞社)、『赤毛のアン』の秘密』(岩波書店)など。